

---

# (仮) 殺人ピエロが幻想入り

@home

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

(仮)殺人ピエロが幻想入り

### 【Nコード】

N2264BA

### 【作者名】

@home

### 【あらすじ】

平和な幻想郷に忍び寄る魔の手！

果たしてその目的とは！？

### 注意

- 1 . 不快な表現や残酷な描写があるかもしれません。
- 2 . 遅筆です。処女作です。
- 3 . 東方の知識は地霊殿まで、あところ覚えです。

## 1・開幕

今宵は満月。時は丑三つ時。

幻想郷には『魔法の森』と呼ばれる場所がある。

漂う瘴気が強すぎる為、人は滅多に訪れぬ森。

しかしながら薬品や薬の材料となる貴重な植物なども生息し、それを狙う人間が入り込む事も屢々。

尤もその半数以上は幻覚などによって惑わされ野垂れ死ぬか、凶暴な獣や妖怪の餌になる。

『魔法の森』は人里の様に安全な場所ではない。

人里の外では、妖怪は人を殺す事もなぶる事も赦される治外法権なのである。

故に 夜雀の妖怪『ミステリア・ローレイ』は驚いていた。

いつものように夜空を遊覧飛行中、夜目が効く彼女は眼下に人らしきモノを発見した。

どうせ人型の獣人か何かだろう、と思ったがなんだか今日に限って凄く気になる。

なので少し高度を落として接近してみる事にした。

近づいて見ると服を着ている。

服を着ている知性を持った妖怪も珍しくはないが、その場合大抵力の強い妖怪だ。

長きに渡りこの森に住んでいる自分が知らないはずはない。

臍氣に後ろ姿しか見えないが、ミステリアはこれは迷い込んだ人間だ、と結論付けた。

一瞬脳裏に、何故この時間にこんな場所に人間がいるのか、と疑問が浮かんだがそれも直ぐに消えた。

彼女にとって今は目の前の人間でどう遊ぶかの方が重要な事なのだ。

「」

鼻唄混じりに能力を発動する。

ミステリアの能力は人を鳥目にする事が出来る。能力の範囲に入った人間は昼夜問わず一瞬で目の前が真っ暗になる。過去に彼女が鳥目にしてきた人間は、突然の事に慌てふためき転んだり叫んだりした。

中には崖から転げ落ちたり恐怖で失禁する者もいた。

さて、目の前の人間はどのような反応を見せてくれるのか。

「……………あれ？」

時にして十秒程経つただろうか人間に変化はなかった。

強いて言うなら能力を使った瞬間歩みを止めたぐらいだ。

うめき声一つもあげない。

もともと夜なので暗かったとはいえ、月明かりで数メートル先まで見えたはず、それが急に見えなくなったのに動じないとは…。

ミステリアは不思議に思う。

まさかこの人間立つたまま寝てるんじゃないか、とつい考える程全く動かなくなった。

しかし、このまま見ているも仕方ないのでミステリアは次の行動をおこす事にした。

(腕の一本でも食べれば動くかな?)

知性のある妖怪でも人間を食べる。

これは極当たり前の事である。

人間にとって家畜が一つの食材であると同様に、妖怪にとって人間も一つの食材であるのだ。

どちらかと言えば妖怪は、人間から言う家畜を食べるより人間を食べる方が自然なのである。

久しく人間を食べていなかったし、まあ里の近くじゃないからい

いだろう。

そう思い、ミスティアは人間に近付いていった。  
徐々に迫る男との距離。

ミスティアは丁度男の背後から接近する形で近付いていった。  
浮いているので足音は当然ない。

近づいから分かったが、これは里にいる人間とは違うようだ。  
神隠しにあった外来人も知れない。

頭まで仮装しているのか妙にモコモコした服を着ている。  
おまけにかなり小肥りのようだ。

「…え？」

突如ミスティアの視界が歪んだ。

次の瞬間襲ってくるのは鋭い痛みと熱。

「痛ッ！！？」

右目だ。

右目に何か異物感がある。

それと同時に咄嗟にその場を離れた。感じた事のない痛みに葛藤し  
ながら右目に手を添える。

何か刺さっているのが分かった。

（あの人間に攻撃された？でも何も見えなかった。どうやって？）

ミスティアは痛みにも耐えながらも右目に深々と刺さっているモノを  
抜いた。

「…うぐっ…ナイフ…？」

最早空洞となった右の眼窩からは途絶える事なく血が滴り落ちていく。

残った左目で刺さっていたモノを見ると刃渡り10cm程度のナイフであった。

いくら妖怪だからといっても、もうこの目は再生しないだろう。

取り敢えず今は此処を離れるのが先決だと考えたミスティアは飛び立とうとした。

が、その瞬間景色が反転した。

(あれ?)

自分が転んだ事に気付かず立ち上がるつもりだが、立ち上がれない。

(なんで?)

手を地面につき、立ち上がるつもりでも立ち上がれなかった。

人は極度の緊張状態や恐慌、或いは興奮状態に陥った時、回りの音が聞き取りにくくなったり痛みに鈍くなったりする。

所謂、アドレナリンという物質が脳から過剰に分泌されるからである。

思考する妖怪も同様である。

故に、ミスティアは先程から自分の足がない事に気付かなかった。

「...うそ...うそでしょ?」

信じられない現実。

本来ソコにあるはずの自分の足がない。

たとえ立ち上がるつもりでも、立ち上がる足が無ければ意味がない。

既に、ミスティアの周りは血の池を作っていた。

生きている限り血液は循環する。

だが、循環先がなくなつた両足首からは血が噴水の如く吹いていた。流れた血は地面に染み込み、その大地を紅く染めていく。ミステリアが必死に押さえても留まることなく流れ出る血液は徐々に体力を奪つていく。

(…ああ…わたし…ここで死ぬんだ…)

理解してしまつた。

訳の分からぬまま、自分はここで死ぬと。

もう痛みはなかつた。

血を流しすぎたせい意識は朦朧とし、変わりに眠気と寒さがあつた。

ダルい。

眠い。

寝てしまいたい。

しかし、

「……ま…だ…死にたくな…い…」

残る力を全て出しミステリアの発した最後の言葉は、夜の森へと消えていった。

## 2・胎動

雨。

それは太古から作物や土地に恵みをもたらすとされ、人々に受け入れられてきた。

雨乞い、と呼ばれる風習は現代でも語り継がれている。

しかし、今はその雨が鬱陶しかった。

よく雨の日は体調が悪くなったりする人がいたりするのだが、それとは違う気持ち悪さ。

まわりつく湿気は、自分の精気を奪い取るように感じられる。

「で、なんのよう魔理沙？」

時期は梅雨。

外は大雨。

本来なら状態こんな日に博麗神社なんて行かないのだが、どうしても行かなければならない事情があった。

「なんのようって…霊夢！明らかにこれは異変だぜ！」

パンツ、と机を叩きながら息を荒げる魔理沙。

季節外れの炬燵の上にある蜜柑が転がった。

「…まだ分からないわよ。人間が二人と妖怪が一人…死んだだけでしょ」

丁度魔理沙の対面に座っている霊夢は、努めて冷静に言い放つが、



その表情は平常とは異なり強張っていた。

「お前も分かっているだろ…これは異変だと」

外は本格的に大降りになり、風もでてきている。  
強い風に煽られ障子がガタガタと鳴った。

「……………」

帰ってきた返事は沈黙。

霊夢も思うところがあるのか静かに目を瞑っている。

「……………チツ…分かった。私が調べてくるぜ」

痺れを切らした魔理沙はそう言いながら立ち上がった。  
幕を手に取りくりりと反転し、引き戸を開ける。  
どうやらまだ雨は止んでいないようだ。

「…魔理沙」

「…なんだ？」

いざ飛び立たんとする時、後ろから声が掛かった。

「気を付けなさい」

それは《博麗の巫女》としての言葉なのかそれとも《友人》としての言葉なのか。  
何れにせよ魔理沙にとってどちらでも良かった。  
その一言で、陰鬱だった心が少し軽くなった。

「…ああ。分かってるよ」

時は少し遡る。

場所は幻想郷唯一の人間の里。

「今月で二人目か…」

人里の守護者、白き半獣『上白沢慧音』は自室で考えていた。  
数日前に起きた殺人事件。

最初は迷い込んできた外来人が人里に辿り着く前に、妖怪に喰われたのかと思っただがどうも違うらしい。  
話を聞けば里の住人が、野草を取りに行っただけ戻って来なくなっただけらしい。

おかしいと思った自警団が搜索したところ、里からそう遠くない街道で男の死体を発見した。

そこだけ聞けば、男は運悪く妖怪か野犬の類に襲われ殺されたと思っただろう。

しかし驚くべきはその見るも無惨な死体だった。

慧音は里人に連れられて行った現場で戦慄した。

男の死体は丁度、股の間から上に顎あたりまで裂け綺麗なV字を作っていた。

その他には食べられた形跡も外傷もない。

これは異常だ。

普通妖怪や野犬に襲われた場合、大概食い散らかされて時には骨すら残っていない事もある。

しかしこの死体は明らかに人為的な犯行。

人間の里始まって以来の奇妙な事件に里人間の間でも緊張が走った。

能力でこの男の身にいったい何があったのか歴史をみようにも、死人にくちなし。

死者の歴史までは見れない。

取り敢えず男を埋葬し、胸にモヤモヤを抱えたまま慧音は里に帰った。

そして今日の朝。

里の入り口に男の子の頭が転がっていた。

それは昨日夜に外出したきり帰って来なかった男の子だった。

残念ながら胴体はまだ見つかっていない。

これを受けて慧音はすぐに里全体にお触れを出した。

夜間の外出を禁じる。

夜間以外でも必ず二人以上で行動する事。

そして今に至る。

「…しかし一体誰が何の目的で…」

慧音は同一犯だと確信していた。  
決定的な証拠はないが、長年生きてきた感がこの件は同じ犯人だといっている。

同時にこの事件は自分が解決しないとイケないと思っていた。  
里の守護者として、これ以上里人に危害を及ぼさせる訳にはいかな  
いと。

「慧音！！大変だ！」

静寂を破ったのは 藤原妹紅。

妹紅が勢いよく襖を開けたせいか外れてしまっているが、今は気に  
しない。

この長年一緒に居る友人の焦りようが気にしてる場合ではないと告  
げていた。

「何があつたんだ？」

「犠牲者がまた出た…」

いつになく真面目に妹紅はそう言った。

「…くっ…またか！今度は誰だ？」

「…ミステリア・ローレイだ」

「………なんだと？…場所は？」

あまり親しくないとはいえ、同じ妖怪として面識があるミステリアが死んだ。

それは慧音に大きな衝撃を与えた。

（あいつが死んだだと？）

ミステリアは確かに頭が悪いかも知れないが腐っても妖怪。

しかも幻想郷内ではそれなりの実力はある。

それが殺されたとなると最早この一連の事件は里内だけではなく、幻想郷全体に関わってくるのではないか。

慧音はそう考えていた。

「……………」

妹紅に連れられて行った先は魔法の森。

ミステリアの死体を前に慧音はただ呆然とすることしか出来なかった。

胴体と両足は繋がっておらず、右目はくり貫かれていた。遺体周辺の地面は真っ赤に染まっている。

（…何か手掛かりはないのか…）

「……ん？これは…包丁？」

慧音が周囲を探すとミステリアのすぐ近くに血の着いた包丁が転がっていた。

恐らくこれも犯行に使われたのだろう。

しかし、里で売ってある包丁とはタイプが違うらしい。

取手の部分が見たことのない材質で出来ている。

とすれば…

「妹紅」

「なに？」

「これを持って香霖堂へ行ってくれ」

慧音はそう言うのと包丁を布でくるんで妹紅に手渡した。

この包丁がもし幻想郷にない素材のものなら外から迷い込んだ外来人の犯行かもしれない。

少しでも手がかりを掴むため、慧音は変な物を扱っている変わりの者の店主に期待した。

（あの店主なら何か掴めるかもしれない…）

不意に草陰からガサツと音がした。

普段の慧音なら、もう少し前に自分達に近づいてくるものに気付いたかも知れない。

だが、度重なる異様な事件のせいで如何に慧音とはいえ決して平常心ではなかった。

そして、

「よっ！二人そろって何してんだ？こんなところで」

慧音は後ろから声を掛けられた瞬間しまった、と思った。

しかも比較的この状況を見せたくない人間だ。

だがもう遅い。

隣にいる妹紅が声を掛けようとしたが遅かった。

魔理沙がミステリアの遺体を見つけるまで時間は掛からなかった。

「な……うっ……………」

嘔吐。

当然である。

長年生きる妖怪である慧音や、不老不死のびっくり人間である妹紅はこの程度の死体なら幾度となく見てきた。

しかし親元を飛び出して数年、まだ20にも満たぬ小娘には少々刺激が強すぎる。

しかもミステリアと魔理沙は交遊がある。

見るも無惨なかつての友人の姿に魔理沙は混乱していた。

暫く経ち、胃の中のものを出し尽くしたのか魔理沙はゆっくり立ち上がった。

「ミステリア……………慧音。これは一体どういう事だ！！！！？」

次に現れる感情は激怒。

慧音にあたっててもどうしようもない。

そんな事は分かっている。

分かっているが自分の中に渦巻く怒涛の感情は止められるものではなかった。

慧音はそっと口を開いた。

「ミステリアは殺された」

「そんな事はわかってる！誰に!？」

「それは分からない。…が同様の手口で里に住む人間も二人殺されている」

三人を静寂が包む。

目を伏せる慧音の頬に冷たいものが当たった。

(雨か…)

空を見上げると先程まで晴れていたのが嘘のように、どんよりと錆色に楠んでいる。

パラパラと落ちてくる雨はまるで空が泣いているかのようだ。

「……………」

魔理沙は踵を返し無言でミステリアの遺体に手を合わせる。

慧音と妹紅はそれを黙って見ることでしかできなかった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2264ba/>

---

（仮）殺人ピエロが幻想入り

2012年1月6日15時53分発行